

S-8-1 (8) 媒介生物を介した感染症に及ぼす温暖化影響と適応政策に関する研究

サブ課題代表者 倉根一郎 (国立感染症研究所)



概要

節足動物媒介性感染症、水媒介性感染症、原虫・寄生虫感染症への温暖化影響評価手法を確立し、感染症温暖化影響を全国規模で明らかにするとともに、地方自治体レベルにおける脆弱性や影響評価を行うさらに、アジアの発展途上国への技術移転を通してアジアにおける温暖化影響を評価する。これらの研究により、我が国における適応政策策定に貢献する。また、情報発信により地球温暖化影響への理解を増進させる。

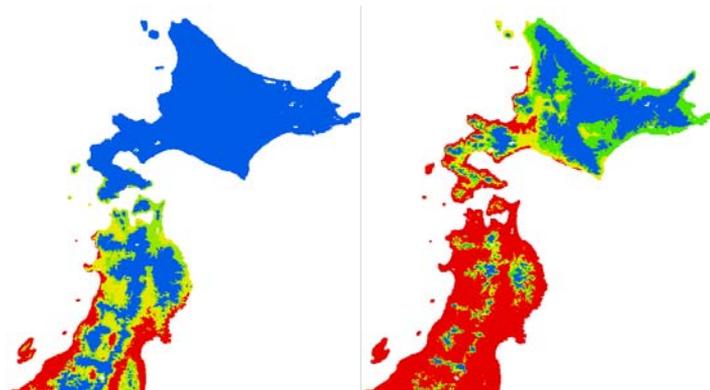
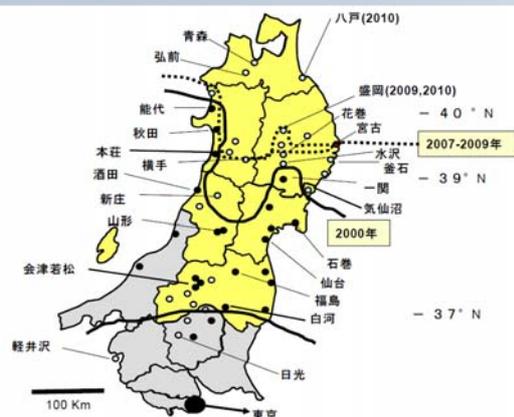
実施体制

研究参画機関：国立感染症研究所

対象地域

アジア (日本、台湾、中国、タイ、フィリピン)

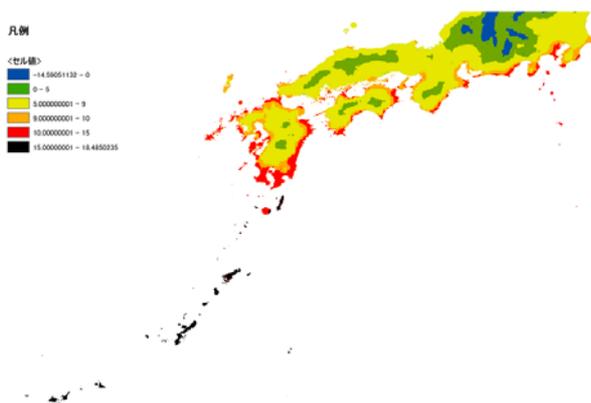
1. 重要な感染症媒介であるヒトスジシマカの分布域は北上している



デング熱やチクングニア熱の媒介蚊である、ヒトスジシマカの分布域北限は毎年北上し、現在東北地方北部である。年平均気温11度の地域と一致する。

(左) 2035年、(右) 2100年のヒトスジシマカの分布予想図 (赤) 2035年本州北端、2100年北海道に分布域は拡大すると予想される。

2. デング熱流行を起こすネッタシマカの日本へ侵入・定着も予想される

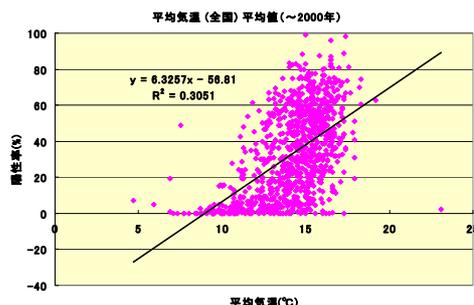
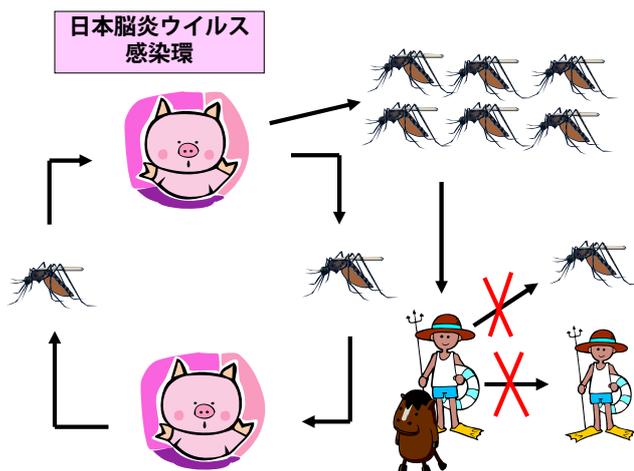


沖縄、奄美大島などでは平均気温が上昇した場合、現在の、台湾南部 (高雄、台南) と同程度の平均気温となる。デング熱の流行が起こるリスクが高まることが予想される。

2100年

- (赤) ネッタシマカ分布可能地域
- (黒) ネッタシマカ流行可能地域

3. 日本脳炎のリスクは地球温暖化により上昇する



- ・日本脳炎のリスクは夏季のブタにおける抗体陽性率によって評価できる
- ・夏季の平均気温、平均最高気温、平均最低気温と相関する。
- ・地球温暖化により、日本脳炎のリスクは上昇し、リスクのある地域は北上する。